

## 発達障害なんか怖くない

「特性」を「障害」にしないために

大高一則，大嶋正浩，大瀧和男編

日本評論社，四六判 216 頁，1,980 円，2024 年 10 月刊

(恩賜財団母子愛育会愛育研究所) 齊藤万比古

本書は日本児童青年精神科・診療所連絡協議会 (JaSCAP-C) の大高一則会長をはじめその理事を中心に 14 名の児童精神科医が発達障害や不登校などの 5 テーマに分かれて議論した内容をまとめたもので、最後に「まとめ」として『『死にたい』『消えたい』という子どもたち』と題して、本書の編集に携わった大高，大嶋正浩，大瀧和男の 3 氏による議論が掲載されている。本書の特徴として，各議論には 1 例ずつ具体的な架空症例が掲げられ，議論はそれを念頭に置いて展開している点，そして各議論の後にその章の議論に参加したスピーカー一人ひとりのエッセイが掲載されており，議論に加わった各氏の背景や考えを知ることができる点などがある。本書を最初に開いた際には流行りの発達障害本の一つかと思っていたが，第 1 章から読み進めるとたちまちそのような書籍ではなく，臨床家として子どもと親に真剣に向かい合い，主治医として自分に何ができると互いに問い合い，議論を通じて答えを得ようと模索する児童精神科医の真摯な思いが込められた書であることがわかった。

本書には心に残る多くの言葉が記されており，その中から評者の心に響いたいくつかを挙げておきたい。第 1 章で大嶋氏が「大勢の中だと，この子どもたち（発達障害の子ども）は隅っこに行ってバリアを張る訓練をしてしまう。……彼らが工夫できる，処理できる範囲で，いい環境の中に放り込んであげたいと思います」と述べているが，これは発達障害の中でも特に自閉スペクトラム症 (ASD) にあてはまる大切な指摘であり，この点を常に支援者が意識していることで，ASD の子どもの自閉性を拡大していくことを防ぎ，第 5 章で大瀧氏も触れているようなカモフラージュのスキルだけが磨かれていく発達経過に陥ることを予防できるという主張として大いに共感を覚えた。第 2 章で牛島洋景氏は不登校

の低年齢化と母親からの分離が難しいという議論を受けて，「暴れたりはしないですけど，不安が高い子が多いような気がします。母子分離が長引いてしまっているような」と語っている。ポツンと発せられたこの言葉を目にして評者はその理由について，母親から良く離れられないのはしかるべきタイミングで母親に良くくつつくことができなかったからではないかという思いを強くした。

ここでは二つの表現だけを挙げたが，本書にはその他にも読者の連想を刺激し膨らませる大切な言葉がたくさん含まれており，それを読みながら評者は長年関わってきた固有の入院病棟を持つ病院児童精神科臨床とは一線を画した診療所児童精神科臨床の情熱を各章の熱心な議論を通じて感じていた。第 5 章で奥野正景氏が語った「病院に予約を入れてくる人は，患者さんの中ではエリートだと思うんです。そうじゃない人が世の中にはいっぱいいて……」という刺激的な言葉は，児童相談所での嘱託医を務める診療所医師が児童相談所職員とともに子どもの心の諸問題対応の最前線を担っているという誇りを感じさせるもので，児童精神科は初診の予約を入れること自体難しいという残念な現状を突き破って社会に貢献しようとする心意気の表明と理解した。JaSCAP-C が今後もこうした心意気と誠実さを持った医師の集団であり続けてほしいというのが本書を読み終えた評者の思いである。